3. Athabasaca実験授業受講記録

高　橋　秀　明

アサバスカ大学の好意により、全部で４名がそのコースを体験する機会を得た。以下、その内の２名について体験レポート・資料・学会報告などをまとめた。

3.1. 受講記録１

受講者：匿名（メディア教育開発センター・事務補佐員　20代女性）

コース名：Online Teaching and Learner Support Technologies in Distance Education (MDDE621)

体験期間：2000.10－2000.12

コンピュータ環境：メディア教育開発センター内で受講者が使用可能なラップトップコンピュータ３台

○中間報告レポート（以下は、山地が作成した質問項目に対して、受講者自らが自由記述の回答の形式で、体験期間中の2000年11月にまとめたものである。）

１．コースおよびＡＵについて

1.1. コースの進め方（学習形態）についての印象と課題

学習者がインターネットを利用して、自分のペースで進められる点は大変便利であると思う。また、講師や他の学習者に直接Eメールでコンタクトをとることが可能なことも、学習者にとってよい点だと思われる。他の学習者や講師と直接意見を交換したりする学習の場は、インターネット上に設けられているディスカッションボードで主に行うので、講師のみと1対１でやりとりするのではなく、大勢の人の意見を読むことができる。また、それに対する講師の返答、アドバイスなど、様々な意見を知ることができるのは、大変に興味深いものである。また、それらは全てウェブ上に残されているので、いつでも後で読み返すことができるし、進度が遅れても自分のペースで進めることができるのがよいと感じた。

しかし、すべてが学習者のモチベーションで進められるので、かなり高いモチベーションがないと、中途半端になりやすいと感じた。

1.2. 学習支援のあり方についての印象と課題

学習支援としては、個人に任せられているという印象を受けた。個人的にアドバイザーが付くわけでもないので、（いるのかもしれないが、少なくとも私は知らない。）個人で授業を進めていく形であった。私の場合、ケアは講師本人からしていただいたことがあった。コースを受講し始めてから、なかなかディスカッション等に参加していない私に対して、講師本人からちゃんとウェブサイトにアクセスできているかなどの確認メールをいただいた。また、英語に苦労していると書いた私のメールに対して、励ましの返答もいただいた。

アサバスカ大学側の、学生に対するサポート体制については、よく分かっていない上での考えなのだが、例えば講師が大変に多忙であったりするのなら、学生に対するアドバイザー等の人物が各コースにいるといいのではないかと思う。授業に関することなら、講師に直接聞くのがよいと思われるのだが、たとえば、個人的に技術的な問題を聞きたい時など、どこまで講師に相談できるものなのか、考えることもあった。

2．ご自身の取り組み方について

2.1. 週平均の学習時間と学習方法

週１日、３時間ほどの学習を続けた。コースのウェブサイトに入り、その週のConference Boardでその週のディスカッションテーマをチェックし、それに対する他の学習者の意見等を、メモを取りながら、読む。そして自分の意見を考えてみる、といったことを行っていた。

2.2. テキスト等の進行状況

ほとんど読んでない。読んでいるのは、スタディガイドを少々。

2.3. オンライン会議等への参加状況

参加したことはない。

2.4. アサインメントの提出状況

前もって決められたものを提出しなければならないのだが、提出したことはない。

2.5. 講師との連絡状況

週に一度ほど、講師からFiretalkの案内（日時、その会のディスカッションテーマの通知）をEメールで受け取る。講師から個人宛てのメールをいただくこともある。

2.6. 学習相談等の活用状況

活用したことはない。相談できるところがあるのか、私は知らないのだが、あったら是非相談したいと思う。

3．関心や理解度等について

3.1. 学習内容への関心の程度

関心は学習を進めるうちに生まれた。私の場合、興味をもったテーマについての議論は、読んでいて興味深かった。そういう場合は学習効果があったように思える。

3.2. 学習内容の理解の程度

遠隔教育に関する知識、経験はゼロであったので、学習体制、アサバスカのコースのシステム、学習内容を理解するのに、しばらく時間がかかった。私の場合、英語で読んで理解し

ながら学習を進めるため、進度は芳しくなかった。ゆっくり時間をかけて読むため、学習時間はある程度の時間的余裕を持って望んだ。

3.3. 英語による学習の困難さの程度

何度かウェブサイトを訪れ、時間を使ってゆっくり読めば理解はできる。私の場合、他の学習者の意見を理解し、それに対する、コメント、自分の意見をまとめあげるということをするには、十分な時間と心の余裕を持って臨まないとできない。ある種の「気合い」のようなものが必要であった。

4. その他

・自由にこれまでの感想や問題点などを整理してください。そのうえで、今後の学習のために必要な工夫や援助が考えられましたら、あげてください。

スタートが遅れたため、ほとんどコースの概要を知らないまま参加し、実際に学習しながら周辺の体制も分かっていくという形になってしまった。振り返ると、かえって効率が悪かったかもしれない。また、時間があまりとれず、一週間ごとのユニットについていくことに気をとられ、テキストをほとんど読んでいないのが問題である。私の場合、時間的な問題もあり、勝手にディスカッションボードの、読み込みと書き込み（まだやっていないが）をメインに学習している。テキストも併行して読むとさらに充実した学習になるのだろう。

また、学習者の自主的な学習が基本となるため、高い目的意識をもってのぞむことが必要だと痛感した、目的があると、ウェブサイトでも重点を絞って読んだり、書いたりできるかもしれない。漠然としたものだと、結局目的が絞れずに、だらだら学習をすることになると感じた。

また、英語であることも、障害のひとつであったと思われる。やはり読み、理解するのに時間がかかるし、自分の意見を述べるのも簡単にはいかない。アサバスカのコースは当然すべて英語で行われるのであろう。そして、日本からの受講者もこれから増えていくかもしれない。日本話者に限らす、他の英語以外の外国語話者も一緒であるのだが、同じ母国語を持つ人同志で意見を交換する機会があったらよいのでは、と感じた。お互いに自分の理解した部分を確認したり、情報を交換したりできるのではないか。

インターネットを通して、学習するということに興味があったのだが、実際には、学習内容がすべて目に見える形で残るので、いつでも読めるし、利点は大きいと感じた。個人のペースで進めやすい。思っていたより、顔も分からない講師や、他の学習者に違和感はなかった。Face to faceの学習のほうが、耳に残る分、理解はしやすいかもしれないが、忘れがちである。その点では、インターネット上に情報があがっていると、すべての内容をもう一度みることができるし、進度の遅れを取り戻すことができると思う。

FireTalkも参加してみたかったのだが、結局参加したことはない。コースが12月に終わるまでに一度は参加すること、ボードによるディスカッションに一度参加することが最終的な目標である。

○その後について

コース体験後１年３ヶ月経過した2002年４月上旬に、高橋が本人に確認したが、上記の中間レポート報告後の学習活動などについて、特記するべき事項はないとのことだった。

3.2. 受講記録２

受講者：高橋秀明（メディア教育開発センター・助教授）

コース名：Human Factors in Educational Technology (MDDE615)

体験期間：2001.1－2001.4

コンピュータ環境：メディア教育開発センター内の受講者の研究室のコンピュータ

この体験を一つの題材にして１件の学会発表を行った。また放送大学を題材にした学会発表を予定している。まずこれらの２件の原稿をそのままを掲載する。最後に両者を比較して、アサバスカ大学のコースについて考察する。

○学会発表１

高橋秀明　2001　遠隔学習過程の記述：Webに基づいたコースの場合　日本教育心理学会第43回総会発表論文集　4.

１．問題：目的と意義について

近年の情報通信技術の発達に伴い、日本においても、インターネットや通信衛星を利用した遠隔教育が、実験的な段階から実用的な段階に入りつつあり、たとえば、「バーチャル・ユニバーシティー・フォーラム」が組織されている（世話役：メディア教育開発センター）。

従来の遠隔教育には、いわゆる通信制のものがあり、さらに放送大学に代表されるテレビ・ラジオ放送を主な媒介としているものがある。このように遠隔教育にはさまざまな形態がありうる。

さて、遠隔教育が実用的な段階に入ったという意味は、遠隔教育を支えるハードウェア・ソフトウェア両面での情報通信技術が整備されたという側面ばかりでなく、遠隔教育で学生が単位を修得することができるという教育制度に関する側面、遠隔教育でも学習効果が落ちないという教育評価に関する側面など、さまざまな側面からの研究が蓄積されてきているということである。そして、これらの諸側面は独立ではなく、互いに関連している。

本研究は主には、教育評価に関する側面に関連している。そして、学習者の立場を尊重して、遠隔学習の過程を記述することを目的としている。遠隔教育の学習者に関する先行研究としては、主に、学習効果を明らかにするための教育心理学的な実験研究・質問紙調査研究と、学習者の意識を明らかにするための質問紙調査研究とがある。しかし、遠隔学習の過程自体を丹念に記述しようという研究はほとんど行われてこなかった。これは研究のコスト・パフォーマンスが悪いためであるが、研究の必要性・重要性は明らかであろう。

本研究にはさらに別の側面からの意義を認めることができる。遠隔学習の過程を学習者の立場から記述するということは、学習者の当該の学習に関わるあらゆる環境、すなわち、学

習者が使用している具体的な機器や教材、学習をしている実時間で生起するさまざまな事象を特定し、その時間変化を追跡していくということである。このように学習過程を記述することによって、実は、情報通信技術や教育制度といった他の側面、さらには学習者の家族との関係など人格的な特性という側面が、いわば制約として透けて見えてくる、ということを期待することができる。

この内、情報通信技術や教育制度といった他の側面が透けて見えるという点は、さらに別の意義とも関連している。すなわち、いわば対面での教育である従来の学校教育の在り方、その成立基盤について再考する機会を与えてくれるという点である。従来の対面教育では当たり前であったことが、遠隔学習では制約や問題として先鋭化するということである。

2．事例：カナダ・アサバスカ大学を調査・受講した経験から

ここでは、カナダ・アサバスカ大学を実地調査し、その大学院コースを体験的に受講した経験に基づいて、遠隔学習過程の1事例を紹介する。

受講したコースは、「Human Factors in Educational Technology（MDDE615）」で、教育工学修士課程で開設されている。事前にテキスト1冊と受講方法についての文書類が郵送される以外は、講義は全てwebを媒介にして行われる。講義は、2ないし3週間ごとに課題をこなしていく実習形式である。web上の教材は、テキストベースである。

学習者支援については、電話での各種相談、図書館などのサービスはアサバスカ大学全体として取り組んでいる。このコースでは、毎週日時を決めて、音声による実時間会議と、電子メール・掲示板による学生間・教官間の質疑とが行われている。

その他、日本における遠隔教育のあり方との相違などに焦点を絞って、遠隔学習の過程を記述した。

謝辞

本研究は、平成12年度放送大学教育振興会助成「遠隔学習過程の記述：ケースによる比較研究」および、平成11・12年度科学研究費補助金基盤研究B（2）（No.11695025）「日加間の遠隔学習における相互作用性に関する研究」の補助を受けた。

○学会発表2

高橋秀明　2002　遠隔学習過程の記述：放送に基づいたコースの場合　日本教育心理学会第44回総会（発表論文集.423.）

1．問題

高橋（2001）は、遠隔学習過程を記述する意義をまとめた上で、遠隔教育の一形態であるwebに基づいたコースの場合を取り上げ、その学習過程を記述した。

本研究は、これとは異なる形態の一つである、放送に基づいた遠隔学習の過程を記述することを目的とする。

2．事例：放送大学の場合

本研究では、放送大学を対象とした。放送大学の授業の形態には、テレビ・ラジオという放送を媒介としたものと、面接授業と呼ばれる対面授業とがある。

放送による授業については、テレビ・ラジオともに１つの科目は、１回45分、全部で15回の番組で構成されている。放送は毎週１回定時に行われる。番組は録画・録音されたテープを、大学本部や各学習センターにおいて借り出して視聴することもできる。また各科目には、それぞれテキストが付いている。履修が認められると、大学本部から質問票が送付され、当該の教科について自由に質問ができる。学期の中頃には、中間テスト・レポートが送付され、それに回答する必要がある。学期の最後には、定められた学習センターで決められた期日に期末試験を受け、一定以上の成績を上げることで単位が認定される。

本研究では、放送大学生１名へのインタビューおよび学習日記によって、放送による遠隔学習の過程を記述した。学生は50代の既婚女性であり、放送大学の全科履修生となって９年目、卒業まで残り数単位という状況であった。平成13年度後期には、彼女は、ラジオとテレビとで１つずつ計２つの科目を履修した。その間に、学習日記を取ることと、自宅での学習風景をスチールカメラに撮影することとを求め、それらの記録をもとに後日インタビューを行う、ということを３週間ほど続けた。また期末試験後にも、試験勉強についておよび今までの放送大学での経験についてインタビューを行った。

本報告では、以上のインタビュー結果の内、いくつかのエピソードを紹介し考察を加えることとする。

• 履修科目の決め方

履修科目を選択する際に考慮することとして、期末試験日、放送の曜日・時間が上がった。彼女は週３日アルバイトに従事しているが、その出勤日と重ならない試験日、放送の曜日であることが最優先される。さらに家事の手すきの時間帯に放送される科目であることが優先される。このような履修科目の決め方は、放送大学の学生になって多年経ち単位数が多く余裕があるために可能になった面は大きいが、このような履修の仕方をしないと継続できないという面も大きい。

逆に、入学後数年間は就労していないこともあり、自分の興味ある科目であることを最優先に履修しており、その頃は幼かった子供に対して「お母さんは勉強の時間」と言って学習をしていたと言う。このように履修科目の決め方は単純ではない。

• いつでも学習できる環境を作る

自宅で放送を視聴する環境は一定である。たとえばテレビを視聴する場所は居間であり、テーブルの同じ席に座り、テキストを開きノートを取りながらテレビを視聴する。テキストやノートは、同じ居間の一定の戸棚に置いておく。

期末試験が近づくと、たとえば医者の待合い時間にテキストを読むとか、自宅の台所にノートやメモを貼っておいて炊事の合間に繰り返し見るというような工夫をして、試験への対策をしている。

さらに、履修している科目に関連する一般の教養番組などを視聴するばかりか、その科目と同じノートにメモを取りながら視聴している。このように、いつでも学習できる環境を整え実行するために、さまざまな資源が使われていることがわかる。

• テキストで済む場合には、放送を視聴しない

放送を数回視聴していると、科目によっては、放送とテキストとの内容とがほとんど同じであることに気づいてくることがある。そしてその場合には、放送を視聴することを止めてしまうことが多い。逆に、放送に、テキストには触れていない資料や解説が頻繁にあると、放送を視聴し続けることが促進される。

これは、教育内容の性質とその内容を表現するメディアの性質との関係ばかりでなく、学生の興味との関係など複雑な要因が絡んでいるので、早急な結論を下すことはできないが、重要な事実であることは確かである。

文献

高橋秀明　2001　遠隔学習過程の記述：Webに基づいたコースの場合　日本教育心理学会第43回総会発表論文集．4.

謝辞

本研究は、平成13年度放送大学教育振興会助成「遠隔学習過程の記述：ケースによる比較研究」の補助を受けた。

3.3. 放送大学コースとの比較から

アサバスカ大コースについては、自分でも満足のいく体験は、1回しかできなかった。第1モジュールが開始される3日前に2時間ほど、webの教材を学習し、web上での学習環境を探索した。その後は数回、クラスの進行状況を数分見る程度で終わってしまった。テキストはほとんど既知の内容であったので、目次を眺めた程度である。オンライン会議には参加しなかったし、講師との連絡などは1回歓迎メールを受け取ったのみであった。

このようにほとんどコースを満足に体験できなかった原因は、大きくは2点あると考えている。このことは、放送大学のコースを研究対象としてみて、その感を強くしている。

1）研究者自らが研究対象であること：体験時には、研究者として、パーソナルコンピュータのモニタ画面をビデオ録画し、同時に自発的な発話も録音した。このために機材を設定したので、狭い研究室が自由に身動きができないほどになってしまった。これを最初の1回、2時間ほど体験したが、次回からは記録用の機材を設定することが面倒になってしまい、記録しないのなら学習しても仕方がない、と悪循環に陥ってしまった。

2）学習を持続する環境を整備すること：今回の体験はあくまでも一時的なものである。自ら身銭を切っていないし、単位が与えられるわけではないし、義務があるわけでもないので、どうしても真剣に体験することができなかった。さらに（言い訳であるが）体験期間中は、仕事上も新しい経験（総合研究大学院大学の立ち上げ）をしていた時期であり、今回の体験

に時間を割くことが非常に困難であった。また、放送大学の場合には、使用されているメディアがテレビかラジオと気楽なものであるのに対して、アサバスカ大の場合には、パソコンでインターネットに接続ということで、コンテンツに依存するが、ある程度以上の高速・広帯域のネットワーク環境でないとストレスを感じることは確かである。放送大学の場合には、放送時間が決められているので、そのスケジュールに自分の生活リズムを合わせやすいとも言える。

アサバスカ大コースを満足に体験できなかったが、放送大学と比較して、その利点をあげることは可能であろう。すなわち、オンライン会議など学生間、学生と教師間での議論が可能であること、電子メールやボードを使用しての質疑・議論が可能であることなどは、是非放送大学でも取り入れるべきである。